

一丸となって国難突破を

倫理研究所理事長 丸山敏秋

令和の御代となって初めての新年を迎え、躍進を決意したのも束の間、予想もなかった出来事が次々に発生しました。とりわけ中国武漢市で発生した未知のウイルスによる感染症が、中国国内はおろか世界中に広がり、甚大な負の影響を与えることになるなどと、いったい誰が想像したでしょう。

感染は百を超える国々に広がり、各国は対応に苦慮しています。早くに感染者が現れた日本の場合、幸いにも現在のところ爆発的な拡大は発生しておらず、季節的なインフルエンザに比べれば、感染者も死亡者もはるかに少ない状況です。

しかし万が一に備えて、北海道では緊急事態宣言を出し、政府は大規模イベントの開催自粛や学校の休校を要請するなどの対策を講じました。倫理研究所でも政府の基本方針を踏まえて、会員組織の活動を二月二十六日より二週間停止し、今月十一日より再開いたしました。倫理法人会のモーニングセミナーなどの日常的な行事は、大規模イベントには当たらず、参加者もほぼ特定できるからです。もとより再開したとはいえ、各都道府県や各地域で状況は異なるため、それぞれで自主的に判断いただくようになっております。

新型コロナウイルスはその正体が不明であるため、人々は大きな不安を抱きます。マスコミ報道も不安を煽る傾向があります。しかし実際は、感染しても治癒した人が多く、致死率もかつてのペストやコレラやスペイン風邪とは比べものになりません。いま打ち克たなくてはならないのは、ウイルスのみならず、ウイル

スに対する過度の恐怖心です。

政府の専門家会議は、国内の流行は長期化するとの見通しを示しました。そうなるときに最も危惧するのは、「コロナ不況」あるいは「コロナ恐慌」と呼ばれている、経済活動の深刻な危機が発生することです。すでにこの二カ月の間に、大きな損失を被る企業が増大してきました。世界恐慌が発生するのではないかと、の懸念もあります。

もし企業の倒産が相次ぎ、日本経済が崩壊の危機に瀕する事態に陥れば、その混乱と損失は現在のウイルス禍どころではありません。いまやわが国は、感染症の拡大を防ぎながら、同時に経済活動も維持していくという、非常に困難な課題に直面しているのです。

なんとしてもここで、踏みとどまらなくてはなりません。未曾有の危機を乗り越えるという強い意志のもと、冷静に沈着に、今それぞれの企業ができること、為すべきことに全力を傾注しようではありませんか。恐怖ウイルスに打ち克つためには、「心の免疫力」を高めることが肝心です。「苦難福門」「明朗愛和」「捨我得全」「心即太陽」「信成万事」……。私たちはそのための学びをしてきました。今こそさらに実践に磨きをかけ、全国の倫友と心を合わせ、一丸となって、国難を突破していこうではありませんか。

最後になりましたが、全国の倫理法人会の役職者および会員の皆さまのご支援、ご尽力に感謝し、益々のご健闘とご健康をお祈り申し上げます。

非常時だからこそ

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

新型コロナウイルスによる感染のさらなる拡大が懸念されることから、去る四月六日より全国の倫理法人会の活動を、約一カ月休止すると通達しました。日本政府の方針や緊急事態宣言を踏まえての措置であり、感染拡大の可能性が低い地域の会友の方々にも、どうかご理解ご協力をお願い申し上げます。

先の通達文にも書きましたように、あくまで集会タイプの活動の休止であって、ITを活用したミーティングや学びの空間づくりなど、積極的に創意工夫してまいります。皆様からも提案やアドバイスを寄せただけでしたら幸いです。

『職場の教養』や『倫理ネットワーク』そしてこの「今週の倫理」も、遅滞なく発行・発信してまいります。つきましては、活動休止期間中の本紙の執筆を担当することとなりました。この非常時における所感や、倫理経営に関することをお伝えいたします。

*

ここ五年ほどの間に、予想外の出来事が多発し、世界の潮流は驚くほど変化しています。一九九〇年代から、ヒト・モノ・カネが国境を越えて往来するグローバル化の波が顕著になりました。ところが二〇一六年になって、イギリスのEU離脱や、トランプ大統領の誕生から、自国ファーストの保護主義の潮流が大きくうねり始まります。筆者は、倫理研究所の今年度の事業方針の冒頭を「国際社会における二大潮流のせめぎ合いが、時代の大変動に拍車をかけている」としました。

すると今年になって、中国発の新型コロナウイルスによる感染症が世界中に広がり、大混乱となりました。ウイルスはまるでグローバル化の波の申し子のように、壁も境も越えて拡散していきます。それによってなんと、世

界は鎖国状態になってしまいました。主要な都市は封鎖され、引きこもりを余儀なくされてしまいました。

いまやわが国でも非常事態が宣言され、ウイルス禍のまっただ中にあります。これまでの経過を振り返ると、報道に疑念を抱いたり、異論や批判を唱えたくなる政府や自治体の対応は多々ありますが、今はそれを言い合ったり早急に乗り切らなくてはなりません。

*

日本でも好まれてきた中国古典の『老子』に、次の一節があります。

「道の道とすべきは、常の道に非（あら）ず。名の名とすべきは、常の名に非ず」

詳しい解説は略しますが、「道（タオ）」は変化してやまないもので、「これが道ですよ」と固定化した言い方はできません（「名」も同様）。すなわち「常」とは変わらない、いつも同じことを意味します。

もちろん世の中は刻々と変わっていきます。しかし多少の波風があつても、ほとんどが予測可能な想定内の動きなので、平然と仕事をしたり、生活できます。ところが時に、まったく予想外の事態が発生します。それが非常時、非常事態にほかなりません。

人が頭で考えることを超えている事態は予測不能です。玄妙な「道」とはそのように、人間の思慮を超えていると『老子』は教えました。『万人幸福の策』第十七条の「神は、幽なるもの、説明を超え、思惟（しい）を絶する……」とよく似ています。

*

昔から「苦境に立たされてこそ人の真価がわかる」と（次ページにつづく）



言われてきました。苦境とは非常時です。いまやその苦境は、個人を越えて世界に広がりました。各国の真価が問われています。

国を成り立たせているのは国民ですから、各国国民の質的レベルや実力が、こういう時にあらわになります。九年前の東日本大震災の際に、日本人の秩序正しい倫理的な行動は、世界から絶賛されました。今回もあの時を思い起し、底力を発揮したいものです。

また、非常時に身を置くことで、ふだんは忘れていた大切なことに気づかされたり、知らなかった自分の一面を知ったり、身近な人について再発見することもあるでしょう。

ある人のブログに対するコメントに、こんなことが書かれていました——「学校が休みになり、小学生の子供が一日中家にいるのがしんどかった。ところが、一緒に時間をかけて学習したり遊ぶことで、まったく知らなかったわが子の良さに気づいて感動した」と。また、授業がない学校で、教員たちの会話が多くなり、お互いを再認識したり、学び合ったりしている、という話も聞きました。ある大学では、授業ができなくなったことでオンラインの本格的な導入に踏み切れたともいいます。非常時だからこそ、変身し進化する可能性もあるのです。

この非常時に、会員企業の多くは、大変な試練に立たされているでしょう。平常時とはあまりにも異なる仕事環境となつて、戸惑いや怒りや不安を押し隠しながら、必死に耐えていらつしやる。月並みな励ましの声など、届くことはないでしょう。

しかしあえて申し上げます。苦境にあえぐ非常時だからこそ、改めて「苦難福門」を、自分を支えるバックボーンとしていただきたい。倫理経営の厳しさがここにあ

ります。

苦難を喜んで受けとめよ、にっこり笑って苦難に取りくめと、倫理運動の創始者である丸山敏雄は教えました。「喜んで」という心のありようが肝心なものです。

今の全世界的な苦境は、個人個人の「生活のあやまり」が原因で引き起こされたものではありません。しかしながら、個人的な苦難でも世界規模の苦境でも、それに立ち向かうときの心の姿勢に違いはありません。暗くうち沈んだ心のままでは、いかなる状況も好転しないからです。

*

ところで世界を苦境のどん底に陥れたコロナウイルスは、「新型」という正体不明の未知のウイルスです。ゆえに人々の恐怖心が煽られ、大混乱の非常事態となつてしまいました。倫理研究所の客員教授にも就いていただいている佐伯啓思・京都大学名誉教授は、三月三十一日の朝日新聞に「現代文明、かくも脆弱」と題して寄稿されました。そこには次の一節があります。

今回のような新型の病原体の出現は、リスクではなく不確実性である。その時かろうじて頼りになるのは、政府や報道ではなく、われわれのもつ一種の「常識」や「良識」であろう。政府に依存し、報道に振り回されるよりも前に、自らこの事態をどう捉え、どう行動するかを判断するための「常識」であり「良識」である。

残念ながら今の日本人は、先人たちが有していた豊かな倫理性に基づく常識や良識を欠いてしまったようです。それこそが危機の真因なのかもしれません。

(次回につづく)

「原点」から湧き出る力

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

行く春や鳥啼(な)き魚の目は涙 『おくのほそ道』

松尾芭蕉が門弟の河合曾良(かわいそら)を伴って旅に出たのは、元禄二(一六八九)年三月二十七日(新暦の五月十六日)でした。多くの人から見送られた心境を、鳥や魚までが別れを惜んでいる、と感じて詠んだのです。この名句を味わいながら、過ぎゆく春と共に、病原性ウイルスも早く消え去ってほしいものだと思います。これまでの新型コロナウイルス感染の経緯でもとも不思議なのは、日本では欧米よりも早く感染者が出たのに、急拡大には至らなかったことです。いくつもの好条件が作用したのでしよう。しかし徐々に感染者や死者の数は増え、万が一にも「爆発」しないようにと、政府の緊急事態宣言が出ました。未知のウイルスであるがゆえに、この先どう変異するかもわかりません。楽観は禁物です。

筆者(丸山)は少し考えるところがあつて、長くマスクを着用しませんでした。マスクでは超ミクロのウイルスは防げないとWHO(世界保健機関)は公言していたし、厚生労働省は「咳やくしゃみの出る人はマスクを」と指導していました。他方、市場でマスクは品薄となり、必要な人が入手できない状況にもなりました。だから体調も悪くない自分は着用しない、と決めたのです。東京では電車の中を見回すと、九割以上の人がマスク姿。着けないで乗るのは、ちよつと勇気がいりました。

しかしやがて、無症状でも感染している場合があるのでマスクを着けよ、とかなり強く言われるようになり、WHOもマスクには一定の効果があると前言を撤回。品薄ではあるものの、量産体制がとれたというので、ようやく自分も屋外ではマスクを着けることにしました。そ

れでわかったのは、今やマスクは感染防止の域を超えて、病原性ウイルスに立ち向かう国民の、団結のシンボルの役割も果たしているということです。

電車の中や道ゆく人々の大半がマスクを着けたり、外出自粛の要請が自治体から出ると町中から人影が激減するのは、日本人のガバナビリテイ(Governability)をよく示しています。耳慣れないガバナビリテイという英語は「統治能力」と訳されていたのですが、それは「真つ赤な誤訳だ」と主張したのが、上智大学名誉教授の渡部昇一氏でした。

それは「被統治能力」と訳すべきだ、と渡部氏は言いました。「従順」という言葉に似て、上から言われたことにはスナオに従うことができる一種の能力がガバナビリテイです。国家でも企業でも家庭でも、国民や構成員にその能力が乏しければ、いくらリーダーの能力が高くても集団は機能しません。

ガバナビリテイに富んでいた日本人は、いろいろな場面面で一致団結の力を発揮してきました。しかしまた度が過ぎると、おとなしい羊の集団のようになってしまいました。あるいは愚かなリーダーがガバナビリテイを悪用すると、全体がとんでもない方向に進むことになります。目下の非常時でも、注意すべき点の一つでしょう。

*

さて前号では、この非常時だからこそ、「苦難福門」を改めて自分のバックボーンにしようと言えました。今回のキーワードは「原点」です。

筆者の場合、出張予定が次々に延期や中止となり、仕事のスケジュールが、すっかり変わってしまいました。

(次ページにつづく)



デスクワークの時間が増えたため、今まで以上に研究や執筆に専念できるようになりました。今年の九月は倫理運動の創始から七十五年目になります。その「原点」と言える頃の資料に改めて目を通すと、いろいろな発見がありました。

創始者の丸山敏雄は、人生の真理を求めて、学校の教師から学問の道へ、また学問から宗教修行へと変転を重ねた人です。戦前の一時期は、ある神道系の宗教教団のリーダーの一人としても活躍しました。ところが政府の弾圧を受けて投獄され、ひどい拷問を受けたり、独房に閉じ込められたりします。

一年あまり後に仮出所すると、足かけ八年もの長い裁判に臨みました。しかし結果は一番二審とも有罪。その間に、丸山敏雄の長年の経験と知識といくつもの「悟り」が熟成されて、万人幸福の生活法則が見出されていきます。宗教に関しては、その排他性を痛感したことから、自身の信仰心は高めながらも、一宗一派にとらわれない姿勢を堅持しました。

そして迎えた敗戦。丸山敏雄は研究に没頭しながらも、混乱し疲弊した世相を見るに見かねて、日本の再建のために立ち上がります。当時の悲惨な国の様子を記憶している人はもう少ないでしょうが、自分や家族が食べるだけでやつとどき、資金もまったくないなかで世直しの事業を始めるなど、狂気の沙汰かもしれません。しかし創始者は、信頼できる「一人」という財産だけは持っていました。

倫理研究所の前身である「新世会」が発足したのは昭和二十二（一九四七）年の秋です。団体を設立して活動しなければ、「倫理」を広く人々に伝えられません。丸山

敏雄は満腔の思いを込めて会の設立趣意書を書き、知友に配って協力を求めました。その趣意書の全文を、「付録資料」として次頁に載せておきます。

世の中にはいろいろな組織、いわゆる法人があります。一般の会社・企業は営利法人ですが、利益の獲得と分配を目的としない法人は非営利法人で、大きくは「社団」と「財団」の別があります。創始者は「社団法人」を選びました。「社」とは人のことですから、多くの人に呼びかけて賛同者となってもらい、会員制度をとることで、その会費を財源とした公益の教育事業を展開しよう——そう決意したのでした。

そのような倫理運動の「原点」については、今までに幾度も話したり書いたりしてきました。設立趣意書も何度となく読みました。しかし、現今のような非常時に、当時のことを改めて確認すると、胸に響くものが違います。

とくに趣意書の「至らぬながら、自分一人で間違いの責を負って立つという強い決心で進みましょう」の一節には、震える思いがしました。その決心は、倫理法人会の会友の方々にとっての「原点」でもあります。

申すまでもなく、皆様の会社においても「原点」があるに違いありません。創業の精神、経営理念、経営哲学……。そんな窮屈な言葉でなくとも、創業時の（あるいは創業者の）熱き思いや当時の苦勞は、自社の「原点」にほかなりません。もちろん、自分自身の「原点」は、生命の元である両親です。『万人幸福の契』第十二条。

この非常時に、じっくりと「原点」に立ち帰り、新たな気づきや感動を腑に落としてください。そこからきつと、思いもかけない前進の力が湧き出るでしょう。

（次回につづく）

〔付録資料〕

〔新世会趣意書〕

我国は今、大切な時に當っております。というのは、道義は乱れ、宗教心は薄らぎ、目を覆わしめることも少なくありません。

今にしてこれを改めなければ、悔いを後に残すでしょう。

日本の再建は、単なる理論や掛声だけで出来るものではありません。目の前の一歩一歩を明るく正しく、喜んで、しっかりとふみしめて行く、これ以外に道はありません。

我国は、古いだけに間違いも積み重なり、悪い習慣も多く、知識の上からも、道義の点からも、世界の国々に、遅れていることが、はっきりと分ってきました。これもまた、今改めなければ、再びその時機は参りません。

これを見、これを見ると、たまらない気になります。至らぬながら、自分一人で間違いの責を背負って立つという強い決心で進みましょう。このままに捨てておいたら、日本が地上に存在する意義も無くなるでしょう。

自ら助けるものでなければ、天は助けません。

本会は、こうした止むに止まれぬ念願から発足致しました。

ここに機関雑誌『文化と家庭』は、正しい生活の源となり、朗らかな家庭のうるおいともならしめたいと誓っております。

世の前途を憂え、世界平和を願う諸兄諸姉、こぞって参加愛読せられますよう、又実践の道づれとして、雄々しく発足せられますよう、願って止みません。

昭和二十二年九月

東京都武蔵野市境九六〇

新世会

*『丸山敏雄全集』第二十四卷下に掲載されています。